

# 学生による学生支援(3)

学生ファシリテーターがたぐく4者(教員・職員・受講生・学生ファシリテーター)の協働体制

京都産業大学 コーオプ教育研究開発センター F工房 事業統括

F工房担当コーディネーター 大谷 哲郎

麻子

今回は、授業や催事等でグループワークの円滑な進行をサポートする学生ボランティアスタッフ「学生ファシリテーター」について報告する。

## 学生ファシリテーターの起源

本学における学生ファシリテーターの起源をたどると、二〇〇五年に開講されたキャリア形成支援教育科目「キャリア・Re・デザイン」に行き着く。同科目は、留年率の高止まりに危機感を抱いたキャリア教育担当の教職員が低単位生向けに立ち上げたものだが、シラバス作成の段階からファシリテーションを組み込んだプログラムとして構想された。その背景には「キャリア教育のコンテンツは教員が教授するものではなく、受講生が対話を通して自ら産出するものであり、その産出を促すためにはファシリテーションのマインドとスキルが必要不可欠である」とする考え方が授業運営チーム(教員、職員、社会人混成チーム)の間で共有されていたことがあった。同科目は開講年度に早くも成果を生む。受

講生のうち三名がファシリテーターからのフィードバックに触発され合宿の開催と教材の開発を授業運営チームに提案し、実際に合宿を運営したのである。このことから授業運営チームは、①閉塞状況に置かれた低単位受講生の有感醸成とモチベーションの向上にはファシリテーターの適切なフィードバックが有効である、②同様に、多様な世代、立場の者がフラットな関係性を構築しつつ対話を産出することが有効である、との認識を得た。この多様な運営者の一人として「学生ファシリテーター」を置くこととなり、科目履修後に学生が自発的にファシリテーターとして授業運営に参加する仕組みが生みだされたのである。

この仕組みは次の二つの成果を生む。①学生ファシリテーターが受講生と教員をつなぐ存在となり、授業参加への意欲向上に有効である、②学生ファシリテーター自身が、授業運営チームと協働することでさまざまな成長を遂げる。こうした学びの場を恒常的に設けたいという関係者の思いがファシリテーション工房の構想につながっていく。

### F工房の立ち上げと学生ファシリテーター活動の展開

その後、学生支援のサービスを充実すべきだという学内世論にこたえるかたちでファシリテーション工房(F工房)を設置し、そこを拠点に全学にファシリテーター・マインドを浸透させる構想が一気に具体化していく。「平成二〇年度文科省新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム(学生支援G.P.)」に採択され、二〇〇九年四月にF工房が開設された。ファシリテーション担当コーディネーター職員(以下、コーディネーター)二名、事務職員一名の人員(現在は二名)で発足し、正課内支援、正課外支援、ファシリテーター養成の三つの領域において様々なプログラムを遂行していくことになった。それとともに学生ファシリテーター活動もその領域を広げ、二〇一二年度、全学部初年次生対象のキャリア形成支援教育科目「自己発見と大学生活」の規模拡大に伴い、F工房の統括のもとで組織化されるに至る。

現在、学生ファシリテーターは正課内では学部初年次科目、キャリア形成支援教育科目、学部専門ゼミ、外国語科目の支援、正課外では各学部新入生オリエンテーションやT.A研修、本学で開催される各種ワークショップ等の支援を行っている。近年は理系学部からも依頼が来るようになった。

コーディネーターは各取り組みにおける学生ファシリテーターの募集・研修・授業時のサポート・ふりかえりを担う。今年度の学生ファシリテーター約六〇名は前述の「自己発見と大学生活」での継続的サポートをメインとしながら、その都度募集される活動に無償で参画している。学生ファシリテーターになる動機としては「活動が楽しそうだから」、「ファシリテーションのスキルを身につけたいから」、「コミュニケーション能力をあげたいから」などが上位を占める。

参画希望学生は、コーディネーターや依頼者との打ち合わせ、プログラム作り、依頼に合わせた研修に参画し、当日の支援に臨む。支援の内容はプログラム運営、そのサポート、グループファシリテーターなどである。教員からの依頼で多いのは、春学期開講科目の初回授業で初対面の学生同士の交流をはかる際の具体的な手法の提供である。

## 事例紹介…学生ファシリテーターがもたらした4つのインパクト

### ①教員へのインパクト

学生ファシリテーターやコーディネーターとの協働を通して、教員が能動的学習のイメージを把握しやすくなり、自らの講義やゼミをより能動的学習に近づけようとする試みが増え

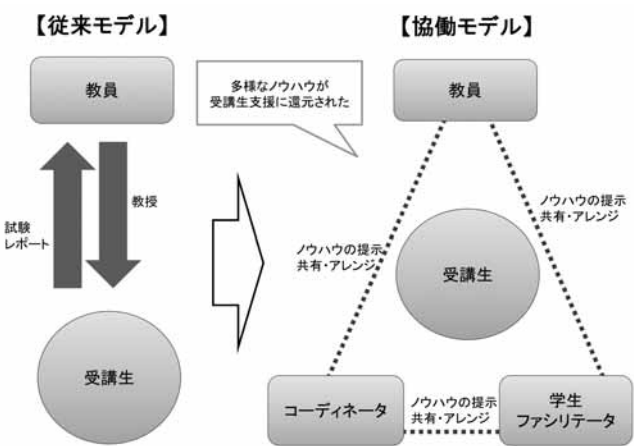


図1 協働がもたらす対教員インパクト



図2 学生ファシリテーターと教員の協働

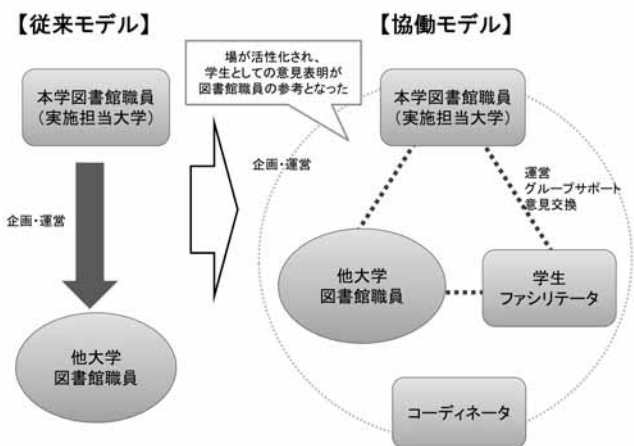


図3 協働がもたらす対職員インパクト



図4 学生ファシリテーターと職員の協働

てきた。一例として、F工房における学生ファシリテータの活動に触発された法学部教員が同学部初年次ゼミにファシリテーションを組み込み、そのノウハウが今度は他学部の初年次ゼミに応用されるという展開がみられた。教員毎にアレンジが加えられ、またその成果がコーディネータと共有されることで、ノウハウが蓄積されるという好循環が生まれつつある。ゼミ生のワークショップ企画や運営の際に、学問の視点も踏まえながら、提案や助言を行う等、学生と新たな形でかかわる教員も出てきている。

### ②職員へのインパクト

複数の大学の図書館職員が集う「図書館での学生支援」意見交換会において、学生ファシリテータが企画し、グループワーク形式で本会を運営した。学生ファシリテータは事前の合意に基づき一学生としても意見を述べたが、彼らの企画により意見交換会が活性化されただけでなく、学生目線からの「図書館がどのようなサービスを提供しているのかが分かりにくい」など忌憚のない意見は、参加した本学・他大学職員が通常触れることのないものであったと評価された。

### ③受講生へのインパクト

学生ファシリテータが授業に参画することでロールモデルの提示になって見られることも見逃せない。「自己発見と大学生活」では、多くの受講生が学生ファシリテータの活動に刺激を受け、新たな一歩を踏み出すきっかけとなっている。実際、先輩の姿を見て翌年に学生ファシリテータになる学生が二〇名ほどいる(二〇一五年度)。今夏、本学で行われたWACE(世界産学連携教育協会)第一九回



図6 学生ファシリテータによる授業支援

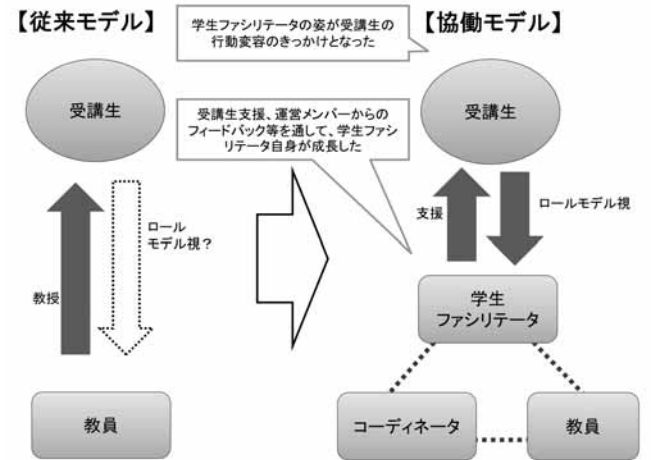


図5 協働がもたらす対受講生インパクトの様子

世界大会の運営においても、学生ファシリテータや「自己発見と大学生活」元受講生が多数参画した(「自己発見と大学生活」については次回詳述する)。

### ④学生ファシリテータ自身へのインパクト

学生ファシリテータの授業や催事への参画は、彼ら自身の成長にもつながっている。プログラムの企画やふりかえりにおいて、教職員・学生からの様々なフィードバックから彼らは有能感や内省の機会を得ている一方、近年はプログラムの企画運営や場のデザインにかかわるノウハウをゼミ授業やサークルで活かすなど、自発的な取組も展開されるようになった。

### 今後の課題

上記のことから、学生ファシリテータは受講生をはじめとするクライアントに寄り添いつつ、プログラムの設計段階から参画し、臆することなく教員や職員に意見を述べ、対話を通じたプログラムの達成に心を配る存在であることがうかがえる。彼らの存在が教職員に与えつつあるインパクトが実に大きいことは私たちF工房にかかわる教員とコーディネータの実感するところであるが、彼らが実践するファシリテーション、およびその結果としての能動的学習形態がどのような効果をもたらしているかはいまだ明らかではない。彼らの存在が、受講生を含め彼らと協働するすべての人にとってどのような意味をもつのかを検証したうえで、学生ファシリテータというユニークな仕組みをより確固としたものにしていきたいと考えている。